

### 第3回境港市みんなでまちづくり推進会議録

日時：令和元年8月23日（金）18：00～20：30

場所：市役所第一会議室

#### 日程

1. 開 会
2. 境港市民活動推進補助金審査
3. 今期取組テーマについての協議
4. 閉 会

#### 出席者（敬称略）

（委員）

渡部敏樹 遠藤恵子 松本幸永 徳尾勝 松本信子 遠藤緑 渡邊冬樹  
門脇京子 足立勲

（事務局）

沼倉加奈子（地域振興課長） 木村哲（地域振興課企画係長）  
渡部大樹（地域振興課企画係主任）

（アドバイザー）

每熊浩一（島根大学法文学部教授）

（傍聴者）

なし

#### 欠席者（敬称略）

松田真二 糸川諒 岩本和貴

#### 1. 開会

（会長）

皆さん、こんばんは。お疲れのところ、お集まりいただき、ありがとうございます。  
これより令和元年第3回目のみんなでまちづくり推進会議を開催いたします。

本日は、ご案内させていただいたように、先に市民活動推進補助金の審査をして、その後、午後7時15分ごろより、島根大学法文学部教授每熊アドバイザー立ち会いのもと、今期の取組テーマ「U・Iターンしたくなるまちづくり」について協議したいと思います。なお、本日は、岩本委員、松田委員、糸川委員が欠席です。

さて、今回は時間があまりありませんので、早速ですが、市民活動推進補助金の審査

に移りたいと思います。事務局より説明をお願いします。

## 2. 境港市民活動推進補助金審査

(事務局)

本年、3回目の募集をしましてところ、一般事業に1団体の申請がありました。審査員の皆様には、事前に書類審査をしていただいております、お忙しい中、ありがとうございました。

事前審査による申請団体の評価点は、お手元の資料のとおりとなりましたので、ご確認ください。審査表の審査基準を基に、申請書のみでの審査をしていただきましたので、この後行われるプレゼン後に得点修正があればそこで修正していただき、審議をしていただきます。

それでは、本日の審査会の進め方について説明いたします。

ヒアリング審査員3名と地域振興課長の計4名でヒアリング審査を行います。ヒアリング審査員3名については、あらかじめ事務局の方で、決めさせていただきました委員の方をお願いしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

※委員異議なし

続きまして、ヒアリング審査の仕方を説明いたします。

最初の3分間で申請団体から申請概要説明をしていただきます。その後、残りの17分間でヒアリング審査員の方に質疑をしていただきます。質疑にあたっては、委員の皆さまでどのような質問をするか、また誰がどの質問をするかという打ち合わせをする時間を設けたいと思います。ですので、質疑にあたっては、ご自身で考えられた質問のみならず、お手元の「審査表集計結果」にあります皆さまの意見を委員の代表として述べていただくようお願いいたします。なお、質疑の間、ヒアリング審査員以外の方には、傍聴をしていただきますようお願いいたします。

プレゼン終了後に皆さまで審議していただきます。そこで、事前にご記入いただいた審査表の得点とプレゼンを参考にしながら採択・不採択の決定を行っていただきます。各事業とも30点満点で、6割の18点が採択の基準点となっております。

以上で説明は終わりますが、何かご質問等ございますでしょうか。ないようでしたら、審査内容の打ち合わせを行いたいと思います。

※委員質問なし

<打ち合わせ>

- ①ヒアリング審査員のうち、誰がどの質問をするか振り分け
- ②質問の意図を確認

<申請団体によるプレゼンテーションの開始>

- ◇1団体目 カニカニマラソン実行委員会
- ・申請事業 第5回カニカニマラソン大会

- ・事業内容 マラソン大会の開催を通じた市民の健康増進と、基幹産業である水産物のPRを図ることを目的とし、開催する。

(委員)

前回の申し込み612名ということでしたが、市民の割合はどれくらいでしょう。

(カニカニマラソン実行委員会)

まだ集計が出来ていないところなんですけど、一つ前の大会が市民の方40%で、市外の方が多かったんです。前回の大会については、子どもの部は比較的市内の割合が多かったのですが、一般の部については50%以上が市外の方でした。

(委員)

ボランティアスタッフの方が40名ですよ。学生の参加もあるんですか。

(カニカニマラソン実行委員会)

境高と総合高校のボランティア部に来てもらって、境高が5名前後、総合が10名前後となっています。

(委員)

やはり、一般の方が多いいいことですね。いろんなジャンルの方が。

(カニカニマラソン実行委員会)

交通安全指導員の方にまずお願いしているのと、市役所のボランティアの方も結構多いです。一般の方もボランティアセンター経由で10名弱いらっしゃいます。それと一番多いのは陸上競技会の関係。そこが一番高校生は多いですね。陸上部の学生が。

(委員)

特別ゲストとありますよね。既に決まっているんですか。

(カニカニマラソン実行委員会)

まだ決まっていません。検討中ですが、とりあえず、予算にはあげています。去年はストレッチの関係のトレーナーの方や名前ほど忘れしましたが、マラソンの専門家の方をお呼びしました。

(委員)

精通された方をお呼びするということですね。

それから、ポスター以外にどんな方法で広報されますか。

(カニカニマラソン実行委員会)

強いて言うと、フェイスブックですね。ポスターは松江から鳥取市までの体育館関係・スポーツ用品店に配らせてもらったのと、市内の小学校・中学校、これまで出られた方への郵送。意外と、フェイスブックを見た県外の方が申し込まれるということがあります。それがすべてではありませんけど。

(委員)

特別ゲストを呼ぶ目的というのはやはり広報のためですか。

(カニカニマラソン実行委員会)

ほかのマラソン大会なんかは、特別ゲストで客を呼ぶってのがありますが、うちの場合は、楽しむカテゴリーを増やしたいということと、空き時間の問題がありまして、各コースばらばらにやっていくので、どうしても空き時間ができてしまう。そこを埋めようというところもあります。

(委員)

大会の目的としてカニや水産物のPRとありますが、カニ汁のふるまい以外にどのようにPRしているのか、またカニ以外の水産物をどうPRしているのか、教えてください。

(カニカニマラソン実行委員会)

大会の名前やカニの被り物を使ってPRしているのと、参加賞で配る金券で境港のおいしいものを食べてもらうというのが一番のPRです。

(委員)

これまでの大会でPRの効果というのはどのように感じていますか。

(カニカニマラソン実行委員会)

境港の水産物をPRできたかという数字としては持っていませんが、単純に参加者が増えてきていることで、金券の発行枚数が増え、経済効果も出ていますので、そういう意味では水産振興に貢献できているのかなと思います。

(委員)

短距離の参加者の方は表彰式まで時間が空いてしまっていますが、どういうイベントをして時間を埋めているのでしょうか。

(カニカニマラソン実行委員会)

短距離の方が全員帰ってくるころからカニ汁を配るので、食べてもらうというところと、

講演会というところで考えていました。過去には出店を出すということも考えて、「出させてくれ」という声もいただいていたんですけど、どこまでの人に声をかけるのかというのがあり、去年は実施しませんでした。場合によっては、自分たちでやっても良いんですけど、余力もない、場所の問題もありまして、なかなか難しいところかなと。

(委員)

参加賞の金券ですが、直売センターのみですか。それ以外では使用できませんか。

(カニカニマラソン実行委員会)

直売センターの敷地にある直売センターとお魚塾だけです。これも広げようという話があったのですが、どこまでというのがありまして。例えば、組合みたいところが金券の処理をすべてしてくれるなら良いのですが、まあ難しいなど。直売センターは山陰旋網さんがすべてを取り仕切って、お金もまとめて払うということもしていますので、そういった受け皿があれば、広げたいなと思うところです。

(委員)

市場の工事の関係もあるのかと思いますが、過去見ると集合場所が固定していないようです。お台場の広場を使えば駐車場も確保でき、人もたくさん入るのではと思うのですが。

(カニカニマラソン実行委員会)

第1回大会はお台場でしました、2回目以降は直売センター近くに移したのですが、お台場はすべてを駐車場として借りています。私も現場まで見ていませんが駐車場もぎりぎりまでいっぱいになるみたいです。

(委員)

協力企業の中で民間企業は、北陽冷蔵のゼッケンだけではないかを見ていますが、他のカニ加工業者の協賛というのはどういう形でやっているのでしょうか。もっといろいろな企業に協力してもらっても良いと思います。

(カニカニマラソン実行委員会)

今の時点で、直接ご協力をいただいているのは、北陽冷蔵のゼッケン。それと日本海新聞社からトイレの4基提供、これは購読をしないといけないというハードルがあります。それと大塚製薬からエイドステーションの飲み物、meiji から参加者用の飲み物の提供、LP ガス協会境港地区会からカニ汁のふるまい。それからもっと色々な企業にという話ですが、広告の面で、金銭的にご協力いただいております。

(委員)

いただいているものも結構な額になりそうですけど、何かお礼とかされているんですか。

(カニカニマラソン実行委員会)

特に改めてお礼というのはないです。プログラムを持って行って「ありがとうございました。」というだけです。

(委員)

文書でもないと。

(カニカニマラソン実行委員会)

最初のころは、写真をつけたハガキを送っていたんですけど、4回目からはしていないですね。

(委員)

できれば、何かお礼状でも。

最後に、将来的にどの程度まで参加の規模を拡大されていきますか。

(カニカニマラソン実行委員会)

短い距離、1.5km、3kmに関しては、これ以上増やすのは不可能と考えています。10kmはまだまだ増やせるかなと思っています。それから余談になりますけれども、この申請をするにあたり、鳥取県の方からサイクリングロードが開通するので何か使えないかという打診があったのですが、なかなかどういう状態でできるのかも分からない中、安全性が確保できないということでお断りしています。場合によっては、それを使って42.195kmというのも、別の大会としてでもできるかもしれないのですが、これはあくまで私の考えだけの話です。そういう誘いがあったということだけお話ししておきます。

(地域振興課長)

5回目ということで「恒例の…」という形になったかと思います。特に子どもの部は特に市民の人气が高いということですから、申し込みは先着順ですか。

(カニカニマラソン実行委員会)

先着順です。

(地域振興課長)

でしたら、1,200円で1,000円分の金券という、いわゆるキックバックがあるということであるならば、市民の枠をあらかじめ取っておくとか、優先枠を取っておくという考えはあ

りませんか。

(カニカニマラソン実行委員会)

これはご意見としてもあったところですが、ただ受付体制も1人でやっているところにイレギュラーな処理をしていくのは難しいかなと思うところです。枠の調整、枠が埋まらなかったときに市外の方を入れるというのも難しいところがありまして、例えば、市外の方が申し込んだけど一杯で、待ってというのなかなかできないと思います。

ご意見として、実行委員会の中でも検討したいと思います。

(地域振興課長)

収支決算書に次年度繰越金として46万円余あがっております。これについて、収支予算書の中に繰越金が入っていないところではあります、この繰越金がまるまる浮く形の収支予算が作られています。この繰越金の考え方を教えてください。

(カニカニマラソン実行委員会)

将来的に自立した運営というのが必要だと思いますし、ある程度のお金をストックしておかないといけないと思っています。ご指摘の決算で46万5千円が繰越金で残っていますので、これを持っておくべきなのか実行委員会のメンバーと相談したいと思います。

(地域振興課長)

この部分が、あくまで実行委員会という組織で確約ができない中で、収支予算を見ると、事業収入と繰越金で全体額が賄えますよね。そうすると、補助金の活用はなくても思いますが、事業収入が117万円あって、自己資金が広告料等で39万円あれば、今年度の事業が市の補助金20万円なくても実施できるんですね。どこまで積み立てるのか、今後の計画・構想があればお聞かせ願いたいと思います。

(カニカニマラソン実行委員会)

質問の内容が少し分からないのですが。

(地域振興課長)

通常であれば、法人格ではない実行委員会ですので積み立てるとかはないと思うんです。次年度に繰り越すということですので、次年度の事業にこれを充てていって、最後、事業を終えるときにどうするかということも考えておかなければならない部分かと思うんですが、本来、繰越金を今年度の収支予算の中で充てていくのであれば、補助金20万円がなくても事業としては成り立つということになるかと思いますが、ですので、今後の計画ですとか、仮に記念大会をされるとかそういった構想があればお聞かせいただきたいと思います。

(カニカニマラソン実行委員会)

現時点で記念大会等はありません。今のところでは、先ほど説明した何かあったとき用のお金というところでキャッシュを残しときたいというところでしかご回答はできません。

(地域振興課長)

何かあったときというのは。

(カニカニマラソン実行委員会)

大会の運営自体が急遽できなくなった場合です。

(地域振興課長)

もし、大会ができなくなった場合には参加料は全て返すという前提ですか。

(カニカニマラソン実行委員会)

返すとはなってはいないです。当然、保険には入っていますが、全くお金がない状態でこれだけの大会をするというのは勇気が要りますし、組織として裏付けのあるお金を持っておきたいということです。

(地域振興課長)

分かりました。

これは質問ではありませんが、他の委員の方からも回を重ねるごとに充実した大会になってきたというご意見がありました。くれぐれも事故・怪我のないように運営してください、というコメントもありましたのでご紹介させていただきます。よろしく願いいたします。

(カニカニマラソン実行委員会)

ありがとうございました。

<プレゼンテーション終了>

(会長)

それでは審議に入りたいと思います。「カニカニマラソン実行委員会」について、プレゼンをお聞きになりまして感じたことなどがあれば発言していただけたらと思います。

※以下、非公開

(会長)

それではこの事業については、採択としたいと思いますが、いかがでしょうか。

※委員異議なし。非公開、終了



それでは、申請団体に対して採択の通知をお願いします。

以上で、市民活動推進補助金の審査を終了します。

### 3. 今期取組テーマについての協議

(会長)

それでは、再開します。本日は、ご案内させていただいたように、島根大学法文学部教授で、第3期から本推進会議のアドバイザーを務めていただいております毎熊浩一先生をお迎えして、今期の取組テーマ「U・Iターンしたくなるまちづくり」について、話していきます。毎熊先生、本日はご出席いただきありがとうございます。

では、ここからは毎熊アドバイザーに進行をお願いしたいと思います。

(アドバイザー)

よろしくお願いします。

事務局の方から進捗状況をお聞きして、どう進めたら良いかとご相談いただいたのですが、議事録を拝見する限りだと、大体方向性は出てるんじゃないかという気もしてしまっていて、ただ事務局としては「自分たちで決めるのも」という遠慮もあってなかなか強く言えないこともあるので、僕から後でご提案させていただこうと思っています。

その前に、一応振り返りをしておこうと思いますので、事務局からお願いします。

(事務局)

事務局から、これまでの協議で出た意見の振り返りをさせていただきます。資料1をご覧ください。

前回・前々回の会議で、「ゴール」をどうするか、「ゴール」のために何をするかという話し合いを行いました。その中で、「ゴール」については、やはり「実践しなければ何をやったのかということになる。」という意見もありましたし、「今期新たに何かをするのは難しいので、いろんな層から話を聞き、来期何をすべきか探り、来期に向けたマニュアル作りを行う」ですとか、「マニュアルという形を取りながらも、提言もあるような形にしてはどうか」という意見がありました。

それから、「何を行うのか」という点については、「出前ワールドカフェの開催（夕日ヶ丘集会所など）や水木しげるロードで観光客からアンケートをとる、テーマから言って、県外に出ている大学生に話を聞くことは必要、ターゲットを絞って、ワールドカフェ等で話を聞く、各委員で移住者へのアンケート徴収し、分析する、インターネットで境港に移住したいかアンケートをとり、分析する、移住者ネットワークを作った人を呼び、勉強会を開く、自衛隊のある街で移住者ネットワークがあれば、その団体を呼ぶ、といった意見がありました。

それから、市でもアンケートを取得しておりまして、参考資料として、平成29年度のアンケート結果と、アンケート様式を添付しております。

説明は以上です。

(アドバイザー)

ありがとうございました。これまでのところでご質問とかご確認とかありますか。アンケートについてはまたあとで触れようかなと思いますけど、30年度はデータが十分でない、ということですね。

(事務局)

そうです。

(アドバイザー)

参考として出されているアンケート用紙は今も使っているものですか。

(事務局)

ちょっとずつは変わっていますが、平成29年度から使っているものです。

(地域振興課長)

鳥取県で共通の項目を確認していて、これをまとめたものを県の方に報告して、県が傾向なんかをまとめて開示しています。

(アドバイザー)

これは転入の届出を出されたときに書くような形ですか。

(事務局)

はい。市民課の方で。

(アドバイザー)

現時点でも続けていると。今年度のを集めようと思うと集められるわけですね。

(事務局)

はい。今日までの日のものでしたら。

(アドバイザー)

というわけですが、よろしいですか。ものすごく簡単にこれまでをまとめていただきましたけども。では、続けていってもよろしいでしょうか。

次第では僕の「ミニ講義」となっています。どこからがミニでどこからがミニじゃないのか分からないですけども。そのあとはみんな意見交換となっています。今日は僕

もパワーポイントまで作っていません。ゼミっぽくやれればと思いますが、20分くらいで終わるかもしれませんし、1時間かかるかもしれません。最終的にどうするか、どんな風に落としどころをつけるか、というところも合意を得られればなと思いますので、僕の方で考えた話題提供をさせていただいて、意見交換をさせていただければと思います。

で、資料の一番最後に僕のレジュメがついていると思いますが、1番目に書いているのが、少し硬く書いておりますが、試案を思案ということで、先ほどの振り返りの中であった最終的なゴールのことを僕なりに言い換えただけでありまして、やはり、最後は何らかの形の文章を残すということなんだろうと。実践と提言と、最初に僕が分けて申し上げたんですけど、提言を出すっていうことも1つの実践ではありますし、文書の中でそれまでやってきた実践を残すっていうことも最終的には提言とか文章になることですので、実はあまり明確には分けられないところがありまして、最終的には何等かの文章が要るだろうと。で、これまで議事録見る限りだと、それが果たして提言と呼べるものなのか、それとも報告なのかっていうのは議論の余地があるとは思いますがけれども、一応、何らかの文章を残すことを目的にしてはどうでしょうかと思います。では、何の文章なのかというと、当然「U・Iターンしたくなるまちづくり」ですから、U・Iターンを進めるためにどんなことが今後必要か、みたいなことを皆さんの方で考える。具体的な提案にまでいかないにしても、これまで調べてこられたことなんかをまとめられて、「U・Iターンってこうして進めていけばいいんだなあ」とヒントになるような、せめてそれくらいのもものは残すべきなんだろうと思っています。一応、これまでの皆さんの意見交換なんかを見てみると、大きくは2つの視点があるのかと思ひまして、1つは、高校生とワークショップしましたよね。例えば、高校生が出て行かない、ずっと残りたい、あるいは出て行っても戻ってきたい、そのためには一体何が必要なのかをまとめる。いわば高校生目線で考えてみる。中学生でも良いですけども。いまここにおられる若い人たちの意見を参考にした提言、あるいは、意見をまとめたもの、これが1つはあるんだろうなあと思ったところです。もう1つは、ずいぶん出ていたのが自衛隊の方や実際にU・Iターンしてきた人だとか、いわば当事者ですよね。当事者の話を聞いて、なぜ来られたのか、出ていきたいと思われるならなぜか、ここに留まり続けるなら、何が効いているのかを調査して、まとめる。少なくともこの2つは、完全に第1部第2部って分かれるかは分かりませんが、情報源としてはあるのかなと思っています。もう1つ、付属資料って書いているのが、マニュアルっていう意見がありましたので、だったら、今までやったことやこれからやるだろうワークショップについて、ちょっと見れば「簡単にできるんだ」というような指南書みたいなものが残せられるとよいかかと。例えば、ワールドカフェってやってみると案外簡単ですよ。効果的なやり方があると思われまので、皆さんの経験からそれをまとめてみるとか。もちろん、そういったマニュアルって市販のものを含めてたくさんありますので、そういったものとの違いをどう出すかとかはしっかり考えないといけないですけど、もし、マニュアルを作るという

ことであれば、ワークショップのやり方、みたいなものをいわば付属編として、これが目的になると少し寂しいので、付属資料とかっていう形が良いと思います。もちろん、皆さんがこれをメインでやりたいということであればそれでもかまいません。U・Iターンしたくなるマニュアルとかですね。まあ、そういったものを成果物のイメージとして描いています。ただ、今すぐこれを作るというのは難しいと思いますので、これからまた調査なり、ワークショップなりが必要となってくると思いますので、2として挙げているのが「1を作成するための取り組み」ということで、1つが「実践」です。「実践しなければ何をしたのかということになる」というご発言もあったかと思いますが、例えば、ワークショップをやってみる。ワークショップの内容についてはまた後で説明しますが、何回できるか分かりませんが、ワークショップをやってみる。ただ、ワークショップというのは一部の人の意見を聞いてみることに過ぎないと言えますので、高校生だと昨年参加した20人で果たして十分かということはあるから、それを補うためにアンケートをやってみるとか、既存のアンケートと使ってみるとか、「分析」と書きましたが、ワークショップ以外の方法で情報を集めることも必要かなと思います。いずれにしても、何等かの情報を集めて、それを元にして最終的に文章を作ることになるかと思いますが、今後やっていくこととしては大きく分けてこういったことかと思いますが、Ⅱに書いていますが、「一定の合意」というものがある程度あるんじゃないかと僕の方で考えまして、議事録見て、U・Iターン関係者から何か聞いた方が良くないかという意見がありましたし、何等かの実践をすべきではないかということ。せめて提言は無理でもマニュアルというようなそんなご意見だったと理解しまして、先ほどのご提案をさせていただいたということになります。

それをもし前提とするならば、「Ⅲ. 今後の課題」というところですが、誰を相手にするのかということですが、「対移住者」と書いていますが、これは既に色々出て来ていましたが、自衛隊の方は移住者と言えるんでしょうかね。一時期ではなく？

(地域振興課長)

転勤で来て、こちらに家を建てて、異動があれば単身赴任というケースが結構あります。

(アドバイザー)

そうすると、それも調査の対象になるとしたら「子供が学齢期になったから」というのも理由の1つかもしれませんね。もしくは、それ以外の魅力も何かあるのかもしれない。ただこれも、効果的な情報がいただけるようなところを狙って、ワークショップなり、アンケートなりしないといけません。その相手を誰にするのかということ。「誰？」としています。

それで、あんまり意見に出ていませんでしたが、高校生と去年やって、あれ1回限りってというのはちょっともったいないなという気もしてまして、例えば、去年来てもら

った高校生に対して、もう一度やって少し深めてみるということもあっていいのかというのもある、①対高校生：②深める」と書いています。それもいろんなやり方があると思いますけど、去年、ある意味、いろんな境港への不満が出ていたと思います。例えば、「就職先がない」。これを聞いて、「ああ、そうだなあ」ってわけにはいかないですよ。探せばいっぱい就職先はあるじゃないですか。高校生はそれを知らないだけかもしれないし、「色々見せられても興味ないよ」っていうなら「自分でやったらいいじゃないか」とか「起業一緒にしてみようや」とか、そういう大人からの応答がある程度できると思うんですね。「ラウンドワンほしい！」と言われても「それは都会しかないわな」としかならんかもしれないけど、大人の方が答えられるところもあると思うので、高校生から出た意見に対して、「こんなあるぜ」っていうのを例えば「プレゼン」して高校生が審査するとか。そのあと一緒になってワークショップしてみるとか。なんかそういう応答して意見交換して、「深める」というのもありなのかなと。それを1回でも2回でも良いんですけど、やっていって、高校生たちが「ここ良いなあ」「いつか戻ってきたいなあ」と思えるようになるとか、そういうことを考えてみるという手もあります。

「(1)広げる」とも書いていますが、あの高校生たちでなくて、別の高校生あるいは中学生とか広く別の人たちとワークショップをやってみて、いろんな意見を集めてみるとかいうやり方もあるかもしれないし、そこは今後残された時間と皆さんのやる気ということで調整があるかなと思います。ほかにもワークショップのやり方はあるかもしれませんが、一先ずはこの2つを対象としたワークショップがあるのかなと思います。「深める」ということであれば、ワークショップはもう物足りないと思います。先ほど、模擬審査会と言いましたが、大人がプレゼンするというイメージです。

今後の課題2つ目は先ほども触れましたけど「分析」です。これはアンケートが既にあるので、使えるのであればそこから何かのアイデアを導き出すとか、足らなければ新たにやってみるとか、先ほど、県のフォーマットでやっているということだったので、これでは十分に足りないというところもあると思いますから、ワークショップは全員は無理ですから、連絡がつく人だけでもアンケート取ってみて、それを分析してみるとかもありなのかなと思っています。もちろん、アンケートだけでなく、鳥取県あるいは島根県が持っている情報なんかも勉強してみるとかということも交えてU・Iターンしたくなるためにはどんな方策が必要なのかということも皆さんなりにまとめていかれるというイメージです。

3番目は「マニュアルづくり」ということですが、この会議自体は過去を遡ればワークショップをいくらかやっていますが、皆さん自身でマニュアルづくりをやられるのであればもう少しご経験された方が良かったりすると思いますので、そういう意味で、先ほど申し上げた高校生とか移住者とかを少し多めにあるいはいろんなパターンでやってみるということも念頭に置きながら実践をしてみたいと思います。

そのマニュアルは何を目的とするかということですが、いろんなところでこういう話

し合いを持った方が良いよねという意見が出てきたら良いと思いますので、そういう自省的な実践を促すためのワークショップ、それをどうやれば良いのかということをもとめてみるということができたらなと思います。

ということで、少し話しすぎましたが、成果物のイメージについて皆さんに合意をいただいて、じゃあそれを作るためにどうするのかという話し合いが今日できればと思っています。

今日はその話し合いをするためにワークショップをすとかということも事務局と話していたんですけど、人数もそんなに多くないですし、いかがですかね。やってみて、あんまり意見が出ないようだと分かれてやってみますか。

どうですかね、成果物のイメージとしてどうですか。

(委員)

私は結構良いんじゃないかなと思いました。後から見返したりできた方が良いでしょうし、形になっていた方が伝わるかなと思いました。

(アドバイザー)

提言とか報告とかのイメージは分からないけれど、やるなら「こんなことやったら良いんじゃない」ということを市役所とか市民の方に提案をしてみるとか多少でもあった方が良いという気もしているのですが。

(委員)

やはり、形になった方が、不特定多数の方が見る事が出来る。それと、今年のワークショップは高校生とお話することが普段ないので、すごく新鮮でした。

(アドバイザー)

普段、高校生と触れ合うことはないですよ。

(委員)

高校生の意見で「Uターンしたくても働くところが…」というものがありました。私の時代、私個人としては、高校を卒業して生活をするために働くということが一番の理由でした。だから、何の技術も能力も持っていないし、とにかく安定した生活をするために働くというのが一番ですね。ただ、去年の高校生との話では、彼らはどんな能力があって、どんな企業に就きたいかという話は聞けなかったけれど、「どこでも良いよ」という考えはないと思います。そうすると、境港で働く場所は限られてくるということなのかもしれないし、その辺の真意を確認したいですね。

もし、時間があれば我々の時代はこうだったという時間もあればという気がしないでもないですが。

(委員)

我々の時代はこうだったなんて高校生に伝えることはないですよ。我々のときは、情報がなかったので、周りの人が助けてくれたところもありましたが、今の子どもたちは逆に情報過多で、周りからの縁はないけれど、自分たちで情報を入れていって、あれはだめ、これはだめとする。その中で地元のことが分かっていない、分からせてもらっていないという面もあると思うんですよ。地元にも良いところいっぱいあるはずなんですけど、「地元で働く場所がない」って言うんですね。そここのところは私たちの時代とは全く違った形になっていると思うんですよ。地元にもこういうところがあるという情報をどうやって伝えていくかということも大事じゃないかと思います。

それともう1つは、自分たちでもできることがあるんだよっていうことです。起業してどんどんやっていく、そういう発想を持っていく、持たせる手伝いができればと思います。なかなか難しいと思いますが。

(アドバイザー)

起業すればいいじゃないかというのはよく聞きますけど、実はリスクがあるじゃないですか。本気で回りの大人、行政なり、業界なりがサポートできているかというのと、できている地域とそうじゃない地域があると思うんですよ。この会議でも話題に出した江津のビジネスプランコンテスト、あれは賞金100万円出ますが、そのあとも徹底的にサポートするんですよ。例えば、「起業したら良いじゃないか」と言うだけじゃなくて、本気で大人が支えるような仕組みを準備するというのが必要で、ここでサポート体制を作るのは無理だと思うんで、調査からサポート体制を作るべきだと提言をされるだとかそういう方向だと思います。

(委員)

そうするともっと仕事に対しての面白みを感じてもらえるんじゃないかと思うんですけどね。いかに支えてあげられるか、独り立ちするまで持っていけるのかということですよ。私たちの団体でも今それが一番の問題になっていて、若い子が入ってきてくれたけど、その子が生活をしていくだけの事業を継続していけるだろうかというところがあるので、本人たちにも自分たちが稼げることを考えてくれ、こっちは考えるからということで一緒にやっていますが、果たしてうまくいくかどうか。必死なんですけど、保証ができませんよね。

(アドバイザー)

そうすると、意見をお聞きさせてもらいましたが、高校生から意見を聞くというのは必要でしょうかね。

(委員)

そう思いますね。

(アドバイザー)

それは、去年来てもらった高校生が良いですか。それは可能なんですかね。

(委員)

卒業しているかもしれませんね。

(アドバイザー)

まあ、去年来てもらった高校生でなくても、去年の高校生の意見を参考に、「起業はどう？」とかを提案してみて、反応を得るとかそういうやり方でも良いですよ。

(地域振興課長)

「先輩たちがこう言っていたけど、あなたたちはどう思う？」というような持っていき方ですね。

(アドバイザー)

そうです。まあ、あんまり変わらないでしょうね。では、高校生とやりましょうか。

(委員)

高校生がいて、いきなり私たちが出るのでなくて、大学生がいるとすごく話しやすいと思います。去年はあれがとても良かったです。

(アドバイザー)

それは時間さえあれば。こちらとしても大変ありがたい機会です。

(委員)

大学生とは話しやすいけれど、我々とは話しにくいというのもまずい面がありますけどね。我々もちゃんと高校生と話す体制を作っていないと。大学生の方に助けてもらうようじゃあ我々の意味がないと思うんですよ。

(アドバイザー)

その辺りも非常に肝で、マニュアルに皆さんの実感として「こうやったら良い、だめ」というのを書けたら良いかもしれません。そういうマニュアルってあんまりないですよ。ご高齢の方のためのワークショップ入門とかですね。



(委員)

若い人とはやっぱりギャップがあるんですよ。いろんな委員会がありますけど、若い人がいないんですよ。そこでいろんなこと決めていったって、絶対間違っていますよね。だって、後期高齢者は仕事できないんですもん。それが口ばかり言って、「やろう」って言ったってできるわけがない。若い人が入っていないと、できることとできないこと、全く違うことを話してしまうこともありますので、それは危険じゃないかなと思います。いかに若い人に入ってもらって、そこで我々も話ができるようにならないといけないと思うんです。

(委員)

大きなイベントを境港でやって、その企画立案を高校生にさせてみたらどうでしょうか。やはり、発想が違いますので、中学生でも良いのですが、企画立案からやってもらってというのを、ここでやるわけではないですが、そういう働きかけができればと思います。

(アドバイザー)

できるか分からないけど、クリスマス会とかを高校生企画でやってみるとかですね。サンタクロースはいっぱいいそうですし。

よく若者の声聞くと、「面白いことがない、楽しいことがない」って言うんですよ。それって、仰ったように自分たちで作れば良い部分もあるじゃないですか。ハロウィンとかも盛り上がるし。

(委員)

子供たちからの発想でやってもらおうと良いですよ。大人はそれにいろんな提供をして。

(地域振興課長)

先生が仰るように、イベントというのもできないわけじゃないです。市民活動センターの事業費も少しはありますし、いろいろなところから支援金とか募金とかも募りながら、手弁当のイベントというのはできるかもしれません。

(アドバイザー)

例えば、U・I ターンとずれてくるかもしれませんが、ハロウィンならハロウィンでイベントと一緒に考えようとかをワークショップの1つの狙いとしてやるのはありますよね。高校生がどれだけ乗るか分かりませんが。

(地域振興課長)

1つ確認ですけど、仮に高校生とワークショップをする場合は、このことについてあなたたちはどう思いますかという聞き方がこれまでだったのですが、今回は、ターゲットを絞ったテーマが設定できるので、大学生にはその答えを導き出してくれるような、一緒に話をする側ではなくて、まとめる側としての参加は可能でしょうか。大人と高校生を繋ぐ役割と言いますか。

(アドバイザー)

一人一人の力量にも寄りますが…、ちっちゃいグループだといっぱい大学生が要りますが、先ほど言ったように、委員の皆さんから提案を行って高校生から意見をもらうということであれば、3つぐらいにグループを分けて、2、3人ずつ大学生をつければ何とかなるんだろうと思います。1人では力量のところもあるので、難しいかと思います。

今お話を聞いていてちょっと思ったのが、昨年出た「こんな不満がある」といった意見に皆さん側からの答えが必要かと思うんです。そこに大学生も入って、アイデアを出すというのはできるかもしれません。

(地域振興課長)

前回のワークショップは若い方の意見を求めたという形だったので、聞き役になってしまったところもあります。なので、反論隊というか、「こんないいところもあるよ」というのを大人たちが言う、そのコーディネートを大学生にお願いできると、違うワークショップの持っていく方にできるかなと。

(委員)

前は、一方的に意見を出してもらっただけだったけど、返すことができればより深まって面白くなるかもしれませんよね。その中間を大学生がやってくれると。

(アドバイザー)

できると思います。2、3人で。これは少し詰めていきたいと思います。一先ず、高校生と大学生を交えて反論隊というようなことをワークショップでやって、できればイベントみたいなものやろうとなれば良いというところですね。最終的には何か導き出して、まとめないといけないですけど、まずはそういう実践してみると。高校生との調整は事務局さんに一任してよろしいですね。

(地域振興課長)

高校の方も授業の中で、地域に出ていくというものが増えていて、ハードルは下がっているのではないかと思います。

(アドバイザー)

移住者に対してはいかがですか。

(委員)

「U・Iターンしたくなる」なので、実際に移住された方の話は聞きたいなあと思います。

(アドバイザー)

色々が一番良いんですけど、自衛隊とか地域おこし協力隊とか。協力隊はいらっしゃるんですけど。

(事務局)

1名いらっしゃいます。

(委員)

若いときは外に出ていたけど、親もなくなり、定年を迎えた人が、空き家になった家に戻ってくるようなサポートができればと思いますけど。

(アドバイザー)

墓参りに合わせてワークショップに参加してくれる方がおられれば良いですよ。

(委員)

多様ですよ。中山間地なんかだと目的が大体一緒なので話もまとまりやすいですけど。

(アドバイザー)

境港市で、U・Iターンの方々の集まりなんかはないですよ。

(事務局)

ありません。

(アドバイザー)

U・Iターン者にアプローチするとしたらこの地域振興課がやることになるのですか。

(事務局)

そうなりますが、現状アプローチする人たちも拾えていない状況です。

(アドバイザー)

そうすると、それを作るのは提案の1つになってきそうですね。

(地域振興課長)

例えば、先ほどの「反論隊」の中に、「ここが良いから僕たちは移住したんだ」という人を入れても良いでしょうか。欲張りすぎでしょうか。

(アドバイザー)

一緒にやるという手もありますが、ちょっと欲張っている感じがします。高校生やって、移住者やって、もう1回ここでやるというのが一番良いですね。「反論隊」さらに連れてきたぞって。

(地域振興課長)

「あれがない」「これがないからやらない」という高校生に対して、「いや、あるよ」という援護射撃をしてくれますよね。

(委員)

移住して来ておられる方は実感も持っておられるし、実践もしておられると思いますから、非常に良い参考を与えてくれると思います。

(アドバイザー)

この委員会で何回やるかというところですが、3回できれば理想ですね。出会いの場を作ること自体が実践にもなるわけですし。

(委員)

実践していることについて講演してもらって、市民の方に聞いてもらうということができれば良いですけどね。「こういう理由でここに来たんだ。I ターンしたんだ」という方がいれば、「境港ってこんな良いところがあるんだ」ってのも分かりますからね。特に、高校生とか中学生が参加して聞いてくれればよいですし。

(アドバイザー)

それを高校生が企画するというのもありですね。

(地域振興課長)

高校生 presents 「あなたは どうして 境港へ」。

(アドバイザー)

「You は何しに境港へ」ですね。タイトル決まりましたね。

(委員)

Iターンで来た人はいろんなことを考えてここに来られたと思うので、その過程を話していただけたらすごく参考になると思うんですね。

(委員)

バスの運転手で、釣りが好きで移住された方がいます。50歳くらいかと思いませんか。

(事務局)

その方ではありませんが、同じく釣りが好きで大阪から夕日ヶ丘に移住された方がいらっしゃいます。

(アドバイザー)

そんな人生送ってみたいですね。島根も来てみて良かったですけど。市役所にもいるんじゃないですか。

(事務局)

いますね。水産関係の仕事に就きたくて、境港市役所を受けて、水産の部署で働いているという人が。

(アドバイザー)

移住者の方については、皆さんの中で、「あの人」「この人」という人達を集めて、それをきっかけに「会でも作ろうか」となれば一石何鳥かになりますよね。顔の見える人を10人、20人。

(地域振興課長)

前期にやった委員1人が1人2人誘ってこようという作戦ですね。

(委員)

以前、いただいた資料で、他の地域にはグループがあるってことでしたが、そこの人達も1人くらい来てくれたら、境港にはないけど作ったらこんな感じだったよというものもあると、こちらも言いやすいかもしれないですね。

(アドバイザー)

良いですね、そういう方がおられると。

(委員)

境港との差別化というか、境港にこういうのがあったらもっと人が来るというのが聞けるかも。

(アドバイザー)

そうですね。実際に、組織を作るならどうしたら良い？というところもありますからね。それを第1弾からやるのか。いてもらっても構わないかなと思います。それはできそうですか。委員さんがお1人ずつで、事務局が5人とか。

(地域振興課長)

実際、転入のアンケートでも若い世代の人たちもいますし、バリエーションはあります。もちろん、日程が合うかというのにはありますが。

(アドバイザー)

転入者の方に声をかけるということは可能ですか。

(地域振興課長)

個人情報の関係でアンケート以外では使えないとなっているので、一本釣りの形でないと難しいですね。

(アドバイザー)

そうすると、声をけていただくのは来ていただく方の倍くらいしていただかないと人が集まらないかもしれませんね。そこは皆さんに名簿なり何なりを作ってもらって、事務局に集約してもらって、声かけをしてもらって、いつくらいにやるかってのも考えてやらないといけないですね。この会ってあと何回できるんですたっけ。

(事務局)

10月に1回予定されており、10月～2月の間で1回、3月に報告書をまとめる会として1回、つまり、実質できるのは2回ということになります。

(アドバイザー)

ワークショップ3回はできないですか。

(地域振興課長)

最後の1回はまとめになりますし、10月は審査もございますね。

(事務局)

前回、高校生とワークショップをしたときは、4時から初めて、6時半から審査という形にしています。

(アドバイザー)

高校生とする際に大学生も呼ぶならそのくらいの時間がやりやすいですね。

(事務局)

そうなる、審査と一緒にやるなら高校生とのワークショップが良いのかなと。もう1回は、ワークショップだけの会ということで自由に時間設定ができますので、そのときは移住者とのワークショップにするのが良いかなと思います。

(アドバイザー)

まあ、その辺りは事務局に工夫してやってもらうとして。内容としては、ワールドカフェ的にしたら良いですかね。それで最後にネットワークでも作ったらという話に持っていけたら。

(委員)

中山間地域なんかだと、転入された方も積極的で個人情報なんて関係ないですよ。だから、いろんな話ができるんですけど。

(アドバイザー)

多分、公民館とかが知ってる人に声をかけて集まるんでしょうね。

(地域振興課長)

顔を見たときに「〇〇があるから見に来ない？」という形で誘って来てもらって、そこで「今度こんなこともするから住所教えて」というステップじゃないと、住所は調べようと思えば調べられるんですけど、それはしてはいけないですよ。

(委員)

自治会の名簿でも今はそうですね。

(アドバイザー)

確認ですけど、先ほど、顔の見える人と言いましたけど、そういう人たちを中心に、チラシでも作って案内出すというのはどうでしょうか。それでどれくらい集まるか分からないですけど、例えば、来たはいいけどそのあと孤独を感じたっていうことが結構あるんですよ。だから、案内を見た人が「良かった～仲間作りたいわ～」となる方が1人でも2人でもおられると、その人が中心となって会ができるかもしれないから。ダメ元でチラシでもして広報してみたら良いかもしれませんね。

(地域振興課長)

今日来られていませんが、夕日ヶ丘という比較的に移住の方が多い地区に住んでおられる委員さんもいらっしゃるので、自治会に掛け合っていただくとかすると良いかもしれませんね。

(アドバイザー)

何十人も集まってしまったときにはまた考えましょう。日程も決めてしまった方が良いでしょう。今日決めますか。夜ですかね。

(地域振興課長)

高校生の方は前回同様とすると、10月下旬か11月上旬ということになります。10月の市報で補助金の希望者を募りますので。

(アドバイザー)

うちのゼミの都合で言うと、月曜日の時間だとちょうどゼミの時間なので、学生を連れ出しやすいですよ。

(地域振興課長)

では、高校の方と調整をかせさせていただきます。

移住者の方も決めていただいても良いですが、事務局的にどうですか。

(事務局)

高校生の方が遅くとも11月の前半ということだと、そこからすぐしようとするとうと総括の資料など作れなくなってしまうので、少し離れたところできるとありがたいです。

(地域振興課長)

高校の予定がありますので、そこをまず早急に決めてしまわないといけませんね。12月は議会もあるので。

(アドバイザー)

高校生がイベントしたいってことになれば早い方が良いですね。クリスマスに何かやろうかってことになるかもしれないです。

移住者の方も年内が良いのではないのでしょうか。そのあとのまとめのことを考えますと。土日の昼間っていうのもありなんですか。どちらが集まりやすいかというのがありますか。

(事務局)

みなさん、平日の夜か、土日ですとどちらが出やすいですか。



(委員)

どちらでも空いていればですね。

(委員)

私は土日の方が出やすいです。

(事務局)

移住者の方も土日の方が出やすいかもしれません。

(アドバイザー)

12月7日の午後とかどうでしょうか。

(事務局)

良いです。みなさんいかがでしょうか。

(委員)

大丈夫です。

(アドバイザー)

もうこれはこの日に来れる人だけと。

(委員)

移住者の方には住所などを聞いておいた方が良いでしょうか。

(地域振興課長)

市役所からまた連絡が来るから、とそこまでのアポイントを取っておいてくださると助かります。なので、住所と連絡先を聞いていただければ。

(アドバイザー)

それでは、2回のワークショップをやるということで、細かいことは事務局と詰めていきたいと思いますが、もう1つ、マニュアルは何等かの形でできれば残すと。少なくとも、今年・去年に何をやったかくらいは残せると思いますので、そのときの苦労話とか伝わらなかったとか、それはそのときに考えればと思いますので。

で、問題は分析ということですが、聞いた限りでまとめられるのか、それとも何かアンケートとかするのか。まあ、U・Iターンの業務もしているのでそこは事務局に勉強していただいて、みなさんに「こんな資料あるよ」とか「こんな人呼んだらどう？」とかを随時送っていただいて、みなさんにも勉強していただいた上で、ワークショップのまとめの会をし

ないといけないんじゃないかと思います。そこは皆さんに自学ということによろしいでしょうかね。

ということで、何となくですけど、今年の方がきまったんじゃないですかね、よろしいですかね。それでは、お返しします。

(地域振興課長)

ありがとうございます。

最後に、少し話をさせていただきます。

毎熊先生がいらっしゃるときにお話したかったことがありまして、今年の3月の議会で議員の方から、住民投票についてということでご質問がありました。それで、内容としては、境港市みんなでまちづくり条例の中に住民投票という項目はあるんですが、それが別に条例を定めるということに留まっていて、住民投票条例という常に条例に定めておくという形もあるのだけど、そこまでの話はなかったのかというご質問の主旨でした。そのお答えとして、いわば基本的な、初歩的なまちづくり条例なので、こういった形で留めてはいるけれど、確かに住民投票についての意見交換もあったし、その勉強もしたという経過もありました、また、10数年経っておりますので、使ってみて使い勝手の良いものなのかはご意見をいただきながら検証していく必要は感じていると答弁させていただいています。

(アドバイザー)

「別に定める」という書き方をしていただいていたか。

(地域振興課長)

「市長は、市民生活に重要な影響を及ぼす事項について、市民の意思を直接問う必要があると認めるときは、住民投票を実施することができます。」それと、

「住民投票の実施に関し、投票に付すべき事項、投票の参加資格、投票の方法、投票結果の取扱いその他必要な事項については、それぞれの事案に応じて、別に条例で定めます。」

(アドバイザー)

常設型ではないんですね。

(地域振興課長)

常設型がすべてではないんですけど、住民投票という住民の権利が、別の自治体でうたわれていると、境港はどうなんだと振り返られたときに、地方自治法で認められているものしかうたわれてないんじゃないかのご指摘があったところなんです。ですが、そのことも踏まえての、みんなでまちづくり条例の制定となっていますので、これで止まってはいけないので、検討の1つには入れていかないとけないというところなんです。

(委員)

原発のことも騒がれています。

(会長)

合併のときには、住民投票をしましたね。

(地域振興課長)

これまで、このことについて質問もなかったのですが、みんなでまちづくり条例に関することでしたのでお話をさせていただきました。

(アドバイザー)

記憶にないですけど、住民投票について踏み込むとかなりの時間をかけないといけないので、多分、そういう書き方にしたんじゃないのかな。

(地域振興課長)

作る際には、委員会だけでなく、別の会議も持たれて、みなさんが勉強した上で、まずは第一歩ということで、決して、事務局が一方向的に歯止めをかけたという作り方ではないと説明しております。

(委員)

散々悩みましたからね。

(地域振興課長)

近いところでは、日吉津村なんかは常設型なんです。

(アドバイザー)

自治基本条例かなんかがあって、ですよ。その議論があったんですよ。自治基本条例みたいにするのか、協働に重きを置くのか。

(委員)

そうです。懐かしいですね。

(地域振興課長)

ということで、そういう話が巷でもあるかもしれませんが、こういう話もあったということは皆さんのお耳に入れておきたかったところです。

(会長)

ありがとうございました。ほかにご覧ですか。

(事務局)

配布したい資料がありますのでお配りします。

1つは、第二中学校で9月28日にCHA×3プログラムという中学生と大学生と大人で楽しく語り合うというイベントを実施するとのこと。二中校区の方でなくても、良いそうですので、ぜひご参加ください。大学生は島根大学の教育学部の方が来られるそうです。

(委員)

これのことを話そうか迷ってました。もう申し込んであります。

(事務局)

この会以外のところでも出席いただけると。

(アドバイザー)

ぜひこういう機会を活用してもらいたいですね。

(事務局)

それと、婚活のイベントのチラシ、こちらは中海・宍道湖・大山圏域市長会の事業になるのですが、出会いの場を設けるということで、イベントをさせていただきます。松江会場が30代～40代、米子会場が20代～30代の独身者が対象となっております。まだ空きがありますので、ぜひ声かけをしていただけたらと思います。結構、好評のイベントとなっておりますので。

(地域振興課長)

婚活だけでなく、地域を知るですとか、自己啓発の要素もあります。

(事務局)

最後は、ふるさと納税の返礼品が載っているパンフレットです。市内の方の寄付に対しては返礼品をお渡しできないのですが、貴重な財源になっておりますので、市外の親戚の方やご友人の方に、ぜひPRしていただけたらと思います。

(地域振興課長)

こちらの方に連絡いただければ、パンフレットをお送りしますので。決して、観光だけに使われているわけではなくて、小中学校にIT環境を整える事業にもこのふるさと納税の基金を活用しています。みなさんの身近なところとしては、側溝清掃にも活用されています。

子どもがいないから関係ないとは思わずに、地域のいろんなことに使わせてもっていますので、どうぞご紹介いただけたらと思います。

(事務局)

事務局からは以上です。

#### 4. 閉 会

(会長)

それでは、以上をもちまして、第3回のみんなでまちづくり推進会議を終了します。委員の皆さま、長時間にわたってご協議いただき、ありがとうございました。